

まえがき

弁証とは、臨床治療の魂ともいえる存在であり、最適な治療方法と最高の治療効果を求めるうえでの基礎となるものである。したがって、弁証の思想や方法、内容などはすべて治療結果に影響を及ぼす。これまでの鍼灸治療における弁証の思想および内容はいずれも不完全なものであり、内容的に欠如していたり、臓腑弁証の思想や方法からの借用がみられるものであった。ゆえに、臨床で用いるには多くの不便な点があるというのが、ここ数年にわたる多くの同業者たちの見方である。では、経脈には完全な、系統立った病候はあるのだろうか。治療に用いることのできる独立した弁証方法はあるのだろうか。これらはより深い研究が必要とされる問題である。こうした考えから、筆者は1980年代にはすでに、この歴史的任務をいかにして完成させるかという計画と研究に着手し始めた。1985年から大学院生を募り、国家教委博士点基金会科研課題の申請を行い、研究費助成の認可を受けた。その後、鍾雷・梁立武・郭長青・白興華・讓銀栓・周立英・張若若といった多くの研究者が時期を前後して資料の収集や部分的な編集・執筆などの基礎的な仕事に参加し、彼ら自身の卒業論文を完成させるとともに、本研究の土台作りを行ってくれた。その後、筆者が10年以上にわたって改稿を重ね、完全で系統立った内容として完成させ、いま、読者のみなさんに見ていただくことができていく次第である。

本書には2つの大きな特徴がある。まず1つは、経脈病候の整合性を系統的に述べている点である。これまでの経脈病候に関する論述は完全なものではなく、分散し、系統立っていないものであった。古典文献のいずれにも経脈病候に関する独立した章節はなく、例えば『靈樞』経脈篇にはただ「是動則病」と「是主所生病」とあるのみである。『脈經』

には十一脈病候の論述があるが、これもまた『内経』と『難経』にある病候関連の記載からの要約であり、いずれも限られた内容しか述べられていない。鍼灸学には2千年以上の発展の歴史があり、すでに豊富な臨床経験の資料が蓄積されており、弁証思想においても大きな発展を経ている。したがって、経脈弁証に関する内容を編修するための余地はおおにあるといえる。筆者は長期にわたる多方面への研究にもとづき、検証を重ねることで、経脈病候の内在連系を完全かつ系統的に反映させた内容を以下の4項目にまとめた。

- ① 本経が内循する本臓（腑）の病候
- ② 本経が外循する肢体や体表部分の病候（外循行線）
- ③ 本経と関連のある臓腑・組織・器官の病候
- ④ 本経の経筋・絡脈の病候

以上のようなまとめ方によって、1本の経脈の内外・上下・縦横すべてに関係性が見出され、これによって初めて経脈の全体像を系統立てて描写することができた。すべての病症に関して根拠となる古典原文（『内経』および後世の名著を含む）を取り上げ、その精華といえる内容を記載しており、参照した歴代の名著は120部以上にのぼる。さらに筆者の経験を加えることで、内容をより豊富なものとした。

2つめの特徴は、経脈弁証の内容を系統的に述べるとともに、実際の活用方法を示している点である。これまでの鍼灸弁証では臓腑弁証の方法が多く用いられてきたが、臓腑弁証の方法では取穴の根拠としては非常にわかりづらく、鍼の操作などへの応用も簡単ではなかったため、そこに大きな限局性があった。中薬を内服する治療方法は鍼灸治療とは当然ながらまったく別の種類の治療方法であり、『素問』移精変氣論にも「毒薬（中薬を指す）はその内を治し、鍼石（鍼灸を指す）はその外を治す」とある。つまり中薬を内服する治療法では胃腸での吸収を経て病を治すのに対し、鍼灸治療では経脈穴に刺鍼することで、人体の正気を調動し、気血を調節するのであり、両者は目的は同じであるものの、方法や過程

が異なるのである。したがって、鍼灸治療にも独自の完成した弁証論治体系が必要と考えられる。本書は中医理論と鍼灸治療の特徴をベースに臨床経験を組み合わせ、以下の4方面から弁証内容の研究を行った。

①虚実寒熱の四綱弁証。正邪関係・病性関係をもとに弁証を行う

②弁証が確立した後の治療原則と取經論治

③取穴法則と適切な手技

④治療原理の解説

上述の4つの過程を通じて鍼灸弁証論治をより完璧で系統立ったものとするこゝで、これまでの鍼灸弁証の不足を補い、鍼灸弁証論治の体系化をはかった。

本書では經典や名著をベースに、筆者の臨床経験を組み合わせ、鍼灸弁証論治を系統的に論述した。客觀的な事實の提示、主題のわかりやすさ、難解な内容の平易化に努めたつもりであり、中医・鍼灸の研究者および臨床従事者、学生、鍼灸の愛好者らの学習の際の参考書として使っていただければ幸いである。本書の内容は筆者の研究の結果（研究成果三等獎を獲得）を反映したものである。科研課題の審査の際には国内外においても著名な鍼灸家である程莘農教授・王雪苔教授・楊甲三教授・賀普仁教授らからの稱賛をいただいた。しかしながら、鍼灸の弁証論治理論体系の研究は、過去にほとんど類を見ないものであり、本書の内容は先驅的な位置付けとなるため、十分とはいえない部分もあるかと思う。同志である読者の方々からの忌憚のないご指摘を心から希望する次第である。

張 吉

2005 年 10 月 北京にて